

水に入る」という記述がある。

(6) 北京 人民文学出版社、一九八〇年十月第一版 四七頁。

「魯山山行」以前の「魯山」に関する詩文について

山崎 藍

はじめに

このレポートでは梅堯臣の「魯山山行」成立以前に「魯山」について詠んだ詩文、および「魯山」に対するイメージについて触れる。「魯山山行」成立以前に「魯山」に対して一定のイメージが存在しているのであれば、少なからず梅堯臣の詩作に影響を与えたと推測できる為である。

『佩文韻府』、『太平御覽』では「魯山」に関する詩文は元魯山、つまり元徳秀に関するものしか記されていないかった。『全唐詩』巻二十五皇甫冉に「魯（一作曾）山送別（一作劉長卿詩）」があるが、送別した場所が魯山であったという程度で魯山そのものに対する特別な思いは見出せない。したがって今回は元徳秀の詩と彼の没後から「魯山山行」以前までの詩文より、「魯山」についてのイメージを考察する。

第一章 元徳秀と彼の詩について

元徳秀（六九六―七五四年）は字が紫芝、河南の人。幼くして父をなくし母に孝を尽くし、開元二十一年（七三三年）に進士及第、その後すぐに母が亡くなった。家が貧しく、一族の生活を支えるため自ら望んで魯山の令となった。歳が満ちて職を去り、陸渾のすばらしい山水を愛して居を陸渾に定め隠棲し、酒を嗜み琴を弾いて楽しんだ。元徳秀は

李華に兄事され、蕭穎士、劉迅を友としたが天宝十三載（七五四年）に没する。天下で行ないの高さをたたえられ元魯山と呼ばれた。また李華から文行先生と諡された。⁽¹⁾

『新唐書・卓行伝』『舊唐書・文苑伝』、および『太平廣記』『資治通鑑』にも元徳秀のエピソードが記されているが、彼の詩は現在ほとんど散逸して残っておらず、『全唐詩補編』にある「歸隱」一首のみである。以下の詩は『全唐詩補編』（陳尚君輯校 中華書局・一九八八年）に拠った。

「歸隱」元徳秀

緩歩巾車出魯山

陸渾佳處恣安閑

家無僕妾饑忘爨

自有琴書興不闌

緩やかに巾車を歩ませて魯山を出／陸渾の佳き處、安閑を恣にす／家に僕妾無く、饑うるとも爨ぐを忘れ／自ら琴書有り、興は闌られず

△解釈▽

ゆつくりと車を進めて魯山を出発し／陸渾のよい場所で安閑をほしいままにする／家には下男下女もない（ほどに貧しく）、餓えているにもかかわらず、飯を炊くことをも忘れてしまう／というのも、自分には琴と書籍があるから、趣が尽きることがないからだ

『全唐詩補編』によると、出典は雍正三年（一七二五年）に成立した類書『古今圖書集成』職方典四八八汝州部とされ、作品の成立年は不明。

貧しさの中にあつても琴書を忘れない元徳秀の心意気があらわれている。ただ注意すべきは『新唐書』の伝と同じ、もしくは似たような語が数多くでてくる点である。⁽²⁾ この詩を参考に『新唐書』がつくられたか、あるいは誰かが『新唐書』をもととして元徳秀本人を描き出そうと詩を詠み元徳秀の作としたのかどちらかである。『巾車』は陶淵明の「歸去來辭」にも用いられている。⁽³⁾

「巾車」「家無僕妾」「饑忘爨」「陶然彈琴」といった表現から、「清貧」「隱者」といったイメージを強く感じさせる。

第二章 後世にみる元徳秀のイメージ

元徳秀（元魯山）没後、彼について書かれたものとして、李華の「三賢論」、元魯山墓碣銘并序、白居易「題座隅」、皮日休「七愛詩 其四」、王禹偁「甘菊冷淘」などが挙げられる。

今回は元徳秀を悼みつつ彼への評価を下している皮日休の「七愛詩 其四」、および「魯山山行」の作者、梅堯臣と同じ宋代に生きた王禹偁「甘菊冷淘」より、後世にみる元徳秀像を考えてみたい。

第一節 皮日休 「七愛詩 其四」

「七愛詩 其四」は成立年代は不明。皮日休（八三三？～八八三？）は字は襲美、もしくは逸少。襄陽（湖北省襄樊）の人。鹿門山（湖北省襄樊の東南にある山）に隠れ住み、「醉吟先生」「醉士」「間氣布衣」とも名乗った。咸通八年（八六七年）に進士及第、著作郎から太常博士となる。黄巢の乱の際に黄巢によつて翰林学士に任ぜられたが、彼に対して逆意があるとされ殺された⁴。以下は『全唐詩』（彭定求等奉勅撰 中華書局・一九六〇年）に拠った。

「七愛詩 其四」 皮日休

吾愛元紫芝	清介如伯夷	吾は愛す	元紫芝	清介なること伯夷の如し
輦母遠之官	宰邑無玷疵	母を輦のせて遠く官に之き	邑を宰りて玷疵無し	
三年魯山民	豊穰不暫饑	三年にして魯山の民は	豊穰にして暫くも饑えず	
三年魯山吏	清慎各自持	三年にして魯山の吏は	清慎にして各自ら持す	
只飲魯山泉	只采魯山薇	只魯山の泉を飲み	只魯山の薇を采む	
一室冰檠苦	四遠聲光飛	一室 冰檠の苦あるも	四遠 聲光飛ぶ	

退歸舊隱来 斗酒入茅茨

舊隱に退歸し来たり 斗酒もて茅茨に入る

雞黍匪家畜 琴尊常自怡

雞黍は家に蓄えるに匪ず 琴尊もて常に自らを怡ばす

盡日一菜食 窮年一布衣

盡日 一菜食 窮年 一布衣

清似匣中鏡 直如琴上絲

清なること匣中の鏡に似 直なること琴上の絲の如し

世無用賢人 青山生白髭

世は賢人を用いること無く 青山にて白髭生ず

既臥黔婁衾 空立陳寔碑

既に黔婁の衾に臥し 空しく陳寔の碑を立つ

吾無魯山道 空有魯山辭

吾に魯山の道無く 空しく魯山の辭有り

所恨不相識 援毫空涕垂

恨む所は相識せざること 毫を援げば空しく涕垂る

△解釈▽

私は元徳秀を敬愛する／（元徳秀が）清介なのはまるで伯夷のようだ／母親を車に乗せ遠い官職に就き／村を治めても過失がなかった／三年間で魯山の民は／豊作に恵まれ少しの間も餓えることはなくなり／三年間で魯山の官吏は／潔白さと慎み深さを自ら守るようになった／ただ魯山の泉を飲み／魯山の薇（カラスノエンドウ）を取る（ような生活）／ひと部屋での生活は辛いものだが／遠方にも彼の評判は聞こえていた／官職を辞して隠退し／わずかな酒をもって粗末な家に住み／鶏やキビを蓄えようとせず／琴と酒樽でいつも自分を樂しませていた／一日一回の粗末な食事／生涯一枚の衣／箱の中の鏡のように澄み切った心／琴糸のように真直ぐな性格／（にもかかわらず）世間は賢人を用いることはなく／（結果元徳秀は）隠居所で白髭を生やすほどに年を取ってしまった／黔婁（春秋時代、齊の高土）のように死んでも衾をまとわなかった上に／陳寔（後漢の政治家）のような清廉な士という評判のみ、空しく残った／私には魯山に行く方法がなく（元魯山のような生き方を全うできず）／空しく元魯山の言葉があるだけである／互いに知ることがなかったことを悔み／筆を取っても空しく涙がこぼれるのだ

冒頭で元徳秀の人柄と業績について触れ、彼の伯夷のように清介な人格と、「新唐書」の伝によれば母が亡くなったあと魯山の令にしているが、母親を車に乗せて赴任先へ連れていく孝の精神を褒め称える。彼の赴任によって人々が餓えることなく、官吏も不正に走らなくなつたとし、元徳秀自身も質素な生活を送っていたことを述べる。年が満ちて隠棲するに及び、酒と琴によつて自らを楽しませつつも、死ぬに際して衾すら身につけられなかつた貧しい生活をしめす。この詩で強烈に感じられるのは、作者の元徳秀に対する敬愛の情と、この賢人が世に用いられなかつたことへの無念さ、元魯山の生き方に共鳴しそのように生きたいと思いつつ、現実には徹底できない自らの生き方へのものかしさである。

ここで描かれる元徳秀像からは、「清介」「孝」「質素」、そして「不遇」が感じられる。元徳秀が詠んだとされる「歸隱」の詩に不遇のイメージがさらに付加されたのである。

詩において魯山そのものの描写は「只飲魯山泉」「只采魯山薇」程度しかない。しかし当初「吾愛元紫芝」と記していたのを、「吾無魯山道」「空有魯山辭」と元徳秀の別名「魯山」を使っているのは見逃せない。「歸隱」では元徳秀は魯山を出て陸渾の地で隠者の生活を送っている。一方、皮日休が「七愛詩 其四」で元徳秀を（元）魯山と記したことで元徳秀の人柄の清潔さがそのまま魯山という場所の清浄さに重ねられ、魯山のイメージが形成されたと思われる。

第二節「甘菊冷淘」 王禹偁

「甘菊冷淘」は至道二年（九九六年）の作。王禹偁（九五四〜一〇〇一年）は字は元之。太宗の太平興国（九八三年）に進士に及第し、至道元年（九九五年）には翰林学士となつたが、作詩当時は翰林学士から左遷され滁州に長官として在任していた。⁽⁵⁾「甘菊」はきくくな、菊の一種で甘く、葉にいたり葉を羹にしたりする。「冷淘」は涼麵の一種である。「甘菊冷淘」はきくくなを入れた麵を言う。詩は五言古詩の長いものなので前半の二十句は省略し、元徳秀に言及

している後半部のみ記載する。以下の詩は『王禹偁詩文選』（王延梯選注 人民文学出版社・一九九六年）に拠った。

「甘菊冷淘」 王禹偁

飽慚廣文鄭 飢謝魯山元 飽きては廣文鄭に慚じ 飢えては魯山元に謝す

況吾草沢士 藜藿供朝昏 況や吾草沢の士にて 藜藿を朝昏に供う

謬因事筆硯 名通金馬門 謬りて筆硯を事とするに因り 名を金馬門に通ず

官供政事食 久直紫薇垣 官は政事の食を供し 久しく紫薇の垣に直す

誰言謫滌上 吾族飽且温 誰か言う 滌上に謫せらると 吾が族は飽き且つ温かし

既無甘旨慶 焉用品味煩 既に甘旨の慶なくば 焉んぞ味を品するの煩わしきを用いん

子美重槐葉 直欲猷至尊 子美は槐葉を重んじ 直ちに至尊に猷ぜんと欲す

起予有遺韻 甫也可與言 予を起こす遺韻有り 甫や与に言うべし

△解釈△

満腹になれば広文館にいた鄭虔に恥じ入り／空腹になれば魯山にいた元徳秀にわびる／私はかつて在野の士であり／粗末な食べ物を朝夕食していたのだから／（しかし）間違つて筆と硯をつとめとしてから後／名が金馬門にも通じることがある／朝廷から政事の録を与えられ／久しく中書省に宿直するようになった／（そのような私に対して）だが滌州のほとりに左遷されたなどと言うのだろうか／私の身内は満腹で穏やかな生活を送っているというのに／おいしいものを食べる喜びがなければ、味を評価するわずらわしさも必要無い／杜子美は槐の葉を重んじ／ただちに天子に献上しようとした／（「槐葉冷淘」⁶）という詩には）私を啓発する風流さがある／（そういう詩を創る）杜甫こそはともに語りあうことができる

前半部ではおいしいものに飽きて野菜を食べようとしたところ、垣根の根元にきくなの芽生えを見つけ、それを摘

んで麵と共に食す情景が描かれる。

王禹偁は官吏として名をあげた一方、時の権力により中央から追われる目にもあう。左遷に同情する声も聞こえてくる中、野生の薫り高い甘菊の冷洵によせて鄭虔や元魯山に思いをいたす。

作者は元徳秀が「餓えて死んだ。」と自注をいれている。⁽⁷⁾史書では元徳秀が貧しかったとはしているものの、餓えて死んだとは記していない。にもかかわらず注で加えているのは、この詩の成立時である宋代初期に隠者として元徳秀の名が知られており、しかも「餓えていた」というイメージが固定していた、と考えられる。餓死したとされる元魯山は、食物に代表される物質生活の対極にある純粹精神生活を象徴しているのである。

結論

元徳秀については、彼自身の作とされる「歸隱」より、隠者、清貧の姿が垣間見られる。その面影を踏まえつつも、皮日休によって「不遇」がクローズアップされ、元徳秀と魯山の地は同じイメージで想起されるようになる。王禹偁は「清貧」のなかでの「餓え」に着目した。元徳秀の生き方は、彼の没後確実に共感を持たれ宋代にまで伝わっている。

今回は「魯山山行」で描かれる、魯山そのものの自然の情景を詳しく詠んだ詩文をみつけることはできなかった。また「魯山」から即座に「元徳秀」を連想できるか、という疑問がもたれるかもしれない。しかし細かい点にまで注意を払いつつ詩をつくる梅堯臣であるから、「魯山山行」も河南省を旅して詠んだものであると同時に、元徳秀という人物が住んでいた「魯山」に対してある種のイメージを持った上で、つくったと考えてもあながち的外れではないだろう。

山は俗世とは異なる場所であるが、その中でも「魯山」は「清介」な「隠者」、元徳秀がいた山である。梅堯臣は

自己を精神的に高め、元徳秀のような「清介」「清貧」のうちにおこうと、「魯山」という場所で故意に「迷」という行為をしたのかもしれない。梅堯臣の「迷」は、空間的にはもちろん時間的にも「迷」しているのである。

もしそうであるならば、「人家」は作者が魯山を迷っている時点での山中にある誰かの家でありつつ、実は時間軸を越えて元徳秀が住んでいる「人家」であろう。七句で「人家在何許」と疑問がでてくるほどに六句までの描写では人気はまったく存在せず、梅堯臣は深山幽谷の趣をひたすらに目で追い、心は元徳秀が暮らした隠者の生き方にある。その疑問に対する答えが「雲外一声鷄」である。

「雲外」である以上目ではまだとらえていないものの、梅堯臣は人家で飼われている「鷄」の声を耳にする。「鷄声」は時を告げるものであると同時に、「桃花源記」に描かれるような、隠者の世界を彷彿とさせる。「鷄」の声を聞いた作者は、過去から現在に引き戻される。そしてこの雲の中の彼方に今も隠者が住んでいるのであらうと思いをめぐらすのである。

注

- (1) 『全唐詩補編』（陳尚君輯校 中華書局・一九八八年）の作者注をもとに、『新唐書』（歐陽修 中華書局・一九九五年）で年代を補足した。元徳秀の生没年に関しては、植木久行「唐代作家新疑年録（四）」、『文経論叢』二十六卷三号 人文学科篇XI 弘前大学人文学部・一九九一年）に詳しい。
- (2) 『新唐書』「卓行伝」に「歳満、筍餘一縑、駕柴車去。愛陸渾佳山水、乃定居。不爲牆垣局鑰、家無僕妾。歳飢、日或不爨。嗜酒、陶然彈琴以自娛。」と記されている。
- (3) 『陶淵明集』（逯欽立校注 中華書局・一九七九年）の「掃去來兮辭」では、「或命巾車、或棹孤舟」と詠まれ、注として『文選』江淹「雜詩」注引作或巾柴車。」とある。隠者を想像させる語として「巾車」「柴車」が用いられていたことがうかがえる。
- (4) 『唐才子傳校箋』（傅璇琮主編中華書局・一九九〇年）

- (5) 『王禹偁詩文選』を主とし、『新装版・宋詩鑑賞辞典』(前野直彬編 東京堂出版・一九九八年)で補足した。
- (6) 『杜詩詳註』(仇兆鰲注 中華書局・一九七九年)の「槐葉冷淘」に、「君王納涼晚 此味亦時須」とある。
- (7) 「飽慚廣文鄭 飢謝魯山元」の句の後に、自注で「廣文先生飯不足、元魯山餓而死。」とある。

唐宋詩における「野情」について

宇都 健夫

一 『魯山山行』における「野情」

梅堯臣『魯山山行』の第一句目に、「野情」という語が登場する。詩全体の情景を表出する上で、この語は重要な役割を果たしていると思われる。ではその「野情」とは、一体どのようなものなのだろうか。この点に関して、他の詩に用いられている「野情」と比較しながら考えてみたい。

まず、『魯山山行』を見てみよう。冒頭の「適与野情愜」という句は、「まさに『野情』にぴったり合う」と解釈することができる。では何がぴったり合っているというのか。また、ここでの「野情」とはどのようなものなのか。それを知るためには、以下の句をじっくり読まなければならない。

続く第二句と第三句は、魯山やその周辺の山々を、独りで歩きながら体感した情景を描いている。⁽¹⁾魯山に連なる山々は、高いものもあり、低いものもある。人が歩けば、それに合わせて美しい峰が形を変え、作者はそのような山々を眺め歩いているうちに、独りひっそりとした小道に迷い込んでしまった、というのである。山々の変化を巧みに捉えている点は、理知的と言えようか。

前半の句からは、作者が魯山の山歩きを心から楽しんでいる様子が窺える。美しい魯山の風景、それを体感してい